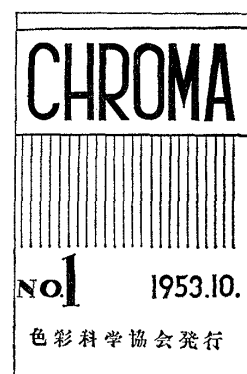


# 日本色彩学会の歩み

色彩科学協会の誕生を昭和23年3月とすると昭和43年に決められましたので、昭和58年度は創立35周年に当たります。これを記念し、今後の学会発展の指針ともするため、35年間の歩みを記録することとなり、有志の方々に筆を執っていただきました。



## 草創の時代

### 1. まえがき

今日の日本色彩学会は会員数599名を容し、日本色彩学会誌および日本色彩学会ニュースを定期的に発行し、アメリカで発行の *Color research and application* の協賛学会になっており、さらに毎年各地で全国大会を盛大に開催するなど、立派な学会活動を続けている。この度、学会創立35周年に当って学会の歴史をまとめようという編集委員会のご意向で、これに賛同して、私はその発端の部分を受持つことになった。

### 2. 虹の会の活動

当学会の前身は色彩科学協会であるが、その奥に虹の会と称する色彩関係科学・技術者の集いがあったことに触れなければならない。第2次世界大戦のさなか、全日本科学技術団体連合会という科学・技術者の各種学会および協会を連合した機構ができて、その下に各種の研究隣組が組織されたが、その一つとして、昭和17年ころ色彩科学を取扱う虹の会ができた。会名は色彩を表に出さないための隠語になっていて、組長である山内二郎博士の発案による。私は世話人をつとめた。

虹の会は議事録をとらないことにしていたため、残された資料は乏しく、僅かに雑誌“科学知識”と照明学会発行の“最近照明工学大観(昭25)”に事績のいくらかを見出せるだけである。前者は雑誌社が“戦争と色彩学”という特集を企画し、虹の会がこれに全面的に協力して、25巻1号(昭20、皇紀2605年)として発行したものである。主要な目次は次のとおりである。

|              |      |
|--------------|------|
| 色彩学の必要性      | 山内二郎 |
| 色彩の表示と測定     | 尾本義一 |
| ライホ色度計の測定技法  | 岡田喜義 |
| オストワルドの色彩論批判 | 金沢寿吉 |

色ガラスの色性

東 堯

色相の判別閾

沢 潤一

塗料と色

広瀬誠一

防空と色彩

横瀬善正

国民教育と色彩

関 秀光

標準色協会の仕事

和田三造

口絵・ライホ色度計の構造

尾本義一

執筆者は虹の会の主要メンバーであり、題目は各自が取り組んでいたテーマであるから、この目次から当時の様子が汲みとれよう。

後者は照明工学の全般にわたって戦時中および1948年ころまでの戦後の発達について総ざらいしたものである。この中に“2-2-3色”が9ページにわたってまとめられていて、わが国の近代色彩学の発達の様子がうかがえる。ここでは、虹の会について“……学問的雰囲気を保ちながら色の諸問題を討議懇談した。……虹の会は戦争末期において会合をもてなくなり、終戦と共に解散のやむなきに至った”と述べてある。

### 3. 色彩科学協会の発足

惨めな敗戦であった。人、家、財産等が蒙った戦禍は、国の再建が危ぶまれるほど甚大であった。焼跡に建てたバラックのわが家は、古トタンで囲ってコールタールを塗るという粗末なものであった。そういうわが家へ、1947年12月のある日、紋付・羽織袴で正装した一人の老人が訪れてきた。亀田と申します。山本インキ(株)の山本専務からの使者として参上しました、という口上であった。山本氏と面識はないが、京大の先輩である篠田阪大教授からの紹介状をもっており、山本氏はその頃発刊になった拙著“色(河出書房)”に感銘を受けたので、立会川にある同社へ来て、色彩学の話を受けたというお誘いであった。これがきっかけとなって、山

本伊得雄氏と知合いとなり、大阪の本社へも伺うことになった。東京でも山本氏の後援を得て色彩学同好者の話合いが始まり、戦時中の虹の会のようなものを復活しようという話にまとまった。

*CHROMA*, No. 1, 1953. 10 (色彩科学協会発行) という雑誌がある。この雑誌は福田保氏が編集兼発行人になっているが、No. 1 を出しただけで、後が続かなかった。その中に関東支部(村上静男記)および関西支部の協会発足時における議事録が載っている。その一部を紹介すると次のとおりである。

#### 関東支部第1回例会

日時：1948年5月15日

場所：電気クラブ2号室(千代田区有楽町)

議事：関西では山本伊得雄、篠田軍治、山崎勝弘氏等が色彩関係研究者の相互理解あるいは研究発表機関としての会合を求めていたのと、関東では尾本義一、東堯氏等が以前の虹の会(色彩関係隣組)のような性格の研究機関を求めていたのが相合して具体的に実を結び、色彩科学協会を呼称し、次のような構成の下に関東支部が成立した。

関東支部 支部長 尾本義一

理事 尾本義一、山上謙一、山内二郎、東 堯

幹事 東 堯

学術紹介 “Gemmaux” について 稲村耕雄

続いて第2回例会(1948. 5. 20)から第32回例会(1952. 2. 25)までの各回の要旨を伝えている。

#### 関西支部報告

##### 色彩科学協会成立経過報告

1) 関係者 協会成立までの関係者は下記のとおり

|             |        |
|-------------|--------|
| 山本インキ株式会社   | 山本伊得雄氏 |
| 大阪大学工学部     | 篠田軍治氏  |
| 京都工芸美術総合研究所 | 山崎勝弘氏  |
| 東芝マツダ研究所    | 東 堯氏   |

2) 1947年中の経過

1947年秋より、山本、山崎両氏間に山本インキ(株)の友誼団体として、また色彩に関する研究の発表機関として色彩関係研究者による研究会的なものを作りたいとの希望の下に、篠田氏の賛同を得て、会の名称、構成、運営等につき若干の打合せを行った。年末、山本氏は社用にて上京の際、篠田氏の紹介にて、マツダ研究所に東氏を訪れ\*、山本インキ研究部との協力および上記研究会設立の意向等につき打合わせ、1948年1月東氏来阪の上詳細に検討決定することを約した。

3) 1948年東氏来阪の時の検討、決定事項

(経過の概要) 1月26日午前、東氏の来阪を迎えて、まず会の性格、名称、その他基本的事項に関して検討し、午後、色彩理論につき講演会を行った。その後、30日上京までの期間を通じて運営、事業等の具体的事項につき、打合わせを行い、また商工省大阪工業試験所山部敬吉氏、

電気試験所大阪出張所長岡田喜義氏、島津製作所橘芳実氏の諸氏と連絡をとり、協力を得ることとなった。

(決定事項)として、名称を色彩科学協会とすること、事務所を当分の間、山本インキ(株)大阪工場内に置き、当分の間経費を同社から支出し、速かに独立採算制をとることにしている。

このようにして色彩科学協会が発足し、初代会長に尾本義一氏、関東支部長に尾本氏が兼任、関西支部長に篠田軍治氏が就任した。

関西支部の第1回例会は

日時：1948年3月25日

会場：山本インキ株式会社大阪工場

講演：天然色写真について 山部敬吉

正倉院の御物について 上村六郎

続いて第2回例会(1951. 9. 15)から第12回(1951. 9. 15)までの各回の要旨を *CHROMA* は伝えている。

今、色彩科学協会の設立当時を思い起こしてみると、重要な役割を果たした数多の群像が浮び上がるが、その中で山本伊得雄氏の印象は強烈である。山本氏はこの時期にだけ彗星のように現れて、色彩科学協会が歩み出すと、しばらくして静かに舞台から姿を消した。山本氏の経済的援助と精神的鼓舞とは協会の設立に欠かせない潤滑油であった。改めて深甚の敬意を表してご冥福をお祈りする。

#### 4. マンセル研究会

色彩科学協会が発足したころのこと、戦時中途絶えていた外国の科学雑誌が入ってきたのを見ると、色彩学でも数多くの優れた研究発表があって、圧倒されるほどであった。これに追いつくために有志が力を合わせようということになって、協会内にマンセル研究会を設け、修正マンセル表色系関係の *J. O. S. A.* (1940~43 ころ) の論文を輪講検討することになった。東京大学の山内教授の研究室に、山内二郎、日置隆一、久保和子、村上静男、安達直義、日下部正夫、森礼於、東堯の諸氏が月1回くらいの頻度で集って熱心に討論したものである。弊衣破帽は昔の高校生に対する形容句であるが、それを地で行く哀れな服装の面々であったが、会合の場は学問的雰囲気満ちていた。修正マンセル表色系のほかにもオストワルド表色系の論文もこなした。検討の成果は技術総説 “マンセル色票系の発達”\*としてまとめられている。

#### 5. 結び

私のもっている資料は限られており、それを殖やそうとしても新しい資料が出てくる望みは少い。そのため、足りないところは記憶で埋めながら本文を綴った。日本色彩学会史の序説として見て頂けたら幸である。

(東 堯 名誉会員)

\* ここは東の記憶と微妙にずれている。

\* 東：照学誌 37(昭27)42。